

愛は苦しみを伴う

2011年10月29日 リバイブ・イスラエル・ミニストリーズ

アシェル・イントレーター

愛は神の御国において最も価値あるものです(第1コリント13章13節)。愛は全ての戒めの中心的動機でもあり(マルコ12章30~31節)、また神ご自身の性質でもあるのです(第1ヨハネ4章8節)。そして人として来られたイエシュアの生きる使命でもあり(ヨハネ3章16節)、苦しみを伴っていたのです。

愛には、他の人との関わり合いが不可欠です。私たちすべての人間はいつも問題を引き起こし、罪を犯します。罪は他人を傷つけます。人を愛するとき、罪により発生する痛みを耐える事が必要です。

私には、人生のあらゆる領域において、人々との愛と信仰に満ちた、素晴らしい人間関係が有ります。結婚、家族、仕事、教会、パートナー、友人たちです。しかしそれら全てに痛みが伴います。神に忠実である事と忍耐とは、長期間の人間関係の痛みを耐える事が必要になります。愛の美しさには痛みが伴う価値が有り、それは犠牲を強いられます。痛みは愛の代償なのです。

ローマ15章1節-私たち力のある者は、力のない人たちの弱さをになうべきです。

第1コリント12章26節-もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、

第1コリント13章7節-すべてをがまんし...すべてを耐え忍びます。

ガラテア6章2節-互いの重荷を負い合い

エペソ4章2節-愛をもって互いに忍び合い

愛のある人間関係の痛みはいくつかの段階において現われます。最初、私たちが関係を持つ人々が弱い場合は、私たちはその重荷を担います。彼らがすべきこと全てをできるわけではないので、足りないところを補わなければなりません。また意図的に傷つけようとするものはないので、痛みというよりは重荷なのです。

第2段階では、他人の痛みを自分の事のように感じることです。イエシュアは、他者の苦しみを感じた際、毎日の祈りの時に泣いておられたことでしょう(ヘブル5章7節)。パウロは、主の権威のもとにある教会の信徒の苦しみを感じたといっています。この痛みは霊的な痛みで、自分自身の痛み

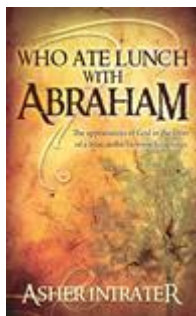
ではありません。それは憐れみと執り成しの、愛による証拠なのです。

痛みの第3段階は、あなたが愛する方があなたを傷つけるものです。その痛みはより直接的です。愛の深さは親密さであり、親密さには心を開いている事が必要です。心を開いている事は脆弱性であり、それはあなたの心が傷つき易い状態なのです。私たちが傷つくとき、私たちは、イエシュアの恵みを受ける事で、許し、大目に見、コミュニケーションを図り、癒しを受けることができるよう助けて下さいます。しかしそのプロセスは、やはり痛みを伴います。

イエシュアは、私たちとの関係を保つために、十字架の痛みを受けたのです。私たちの罪と主の愛は痛みを生じさせました。不幸にも私たちは未だに主が苦しむ原因を作り続けていますが、主は十字架の上で私たちを許され、いまでも許し続けておられます。

コロサイ3章13～14節-互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を抱くことがあっても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。そして、これらすべての上に、愛を着けなさい。

私たちはイエシュアの歩まれた足跡を辿っていくよう召されています。主が十字架でなさったように歩むのです。主が許してくださったので、私たちも他人を許します。私たちとの関係を維持するため、代償を支払って下さいました。私たちを愛するため苦しみに耐えて下さいました。人を愛するため、私たちも痛みを受けるのです。イエシュアが私たちに与えて下さった献身的な愛による信仰をもって歩んで行くのです。



誰がアブラハムと食事したのか

アシェルアッセルの新しい、長く待たれていた本「誰がアブラハムと食事したのか」がようやく届きました。これは、律法書や預言者の書、そして黙示録からイエシュアが主の御使いとしての姿を取ったことを分析するものです。この本はメシアであるイエシュアの永遠の特性と聖書全体を通して徐々に啓示されていくことに関し、あなたに靈感を与え、あなたの理解に問いかけるものです。

この本の主題は長年にわたってヘブライ語の文書を研究してきただけでなく、イスラエルにいる正統派ユダヤ人に福音を伝える現場での経験に基づいています。(もちろん多くの祈りや執り成しがあったことは言うまでもありませんが)。

どうか見逃さないで下さい。どうか注文し、友人にも送って下さい。注文される方は[こちらをクリック](#)して下さい。(本は英文であり、注文も全英文です。)

出版の初期に特別な割引を用意しております。1度の注文でまとめて購入される場合、10冊で10%引き、20冊で20%引き、30冊で30%引きとしております。このまとめてご注文をされる場合、

[こちら](#)にメールを送って下さい。(英文)

(「誰がアブラハムと食事したのか」の序章からの抜粋)

ユダヤ的ルーツ

私は自由な家風のユダヤ人家庭に育ち、若い時分は保守的なシナゴグに集っていました。大学生の時には、霊的真理を探し求めていました。私の個人的な探求、およびハーバード大学での心理学、哲学、古典文学の研究は、私のたましいを満足させるものではありませんでした。

私はあらゆる霊的体験や実験を試してみました。唯一私が考慮してみななかったのがイエスでした。ところが、私の真理探究に一貫性を持たせるためには、新約聖書の福音書を少なくとも1回は読んでみる必要がありました。(何か特別良いものの中にあるとは、余り期待していませんでしたが)

1977年に初めて福音書を読んだ時に、私はそれらがとてもポジティブなものである事に驚かされました。人間としてのイエシュア、その生き様、その教えは私に愛と畏敬の念を起こさせるものでした。その強烈な靈感を放つ方を愛さないではおれなくなりました。

そして1978年、2回目に福音書を読んだとき、2度目の驚きがありました。それは、その福音書が如何にユダヤ的であるかという事に気付いたのです。福音書の中にある全ての事は、イエシュア自身と全ての弟子たちを含め、ユダヤ的だったのです。しかも神の御国に関する世界観のすべては、ヘブル人預言者からのものだったのです。

最初の驚きを経験してから、イエシュアに従う者として自分自身を捧げました。2回目の驚きによって、私はいわゆる「メシニックジャー」の一員となりました。この時点から、私は聖書だけでなく、キリスト教文学やラビ文献の研究を続けていきました。(それらの研究の過程で、私は1980年代の初頭にボルティモア・ヘブライ大学(Baltimore Hebrew University)においてユダヤ教学の、またメサイヤ聖書学院(Messiah Biblical Institute)において神学の、2つの修士課程を終えました。)

キリスト教のユダヤ的ルーツについては様々な論点があります。中でも最も困難なものに数え上げられるのが、律法書(モーセ5書)や預言書における主の御使いについてで、本書はそれらを扱うことを意図しています。